43. 当科で経験した聴器癌症例

耳鼻咽喉科気管食道科
今野　渉　平山　裕　白坂邦隆　内藤文明
深美　悟　大久保昌章　小泉さおり
平林秀樹　谷垣内由之　馬場廣太郎

聴器に発生する癌は非常に稀で、その解剖学的特殊性もあり、診断・治療に苦慮する。

今回我々は過去10年間に当教室で経験した聴器癌は11例について検討し、最近経験した内耳癌1例、外耳道癌1例を中心に報告する。

中耳癌は7例、外耳道癌は4例あり、初発症状はすべての症例で耳漏もしくは耳痛がみられた。初診から確定診断に至るまでの期間が他の頭頸部癌より長い傾向が見られた。組織型は扁平上皮癌が最も多く、治療は全例で化学療法、放射線療法、手術療法のうち組み合わせて行ったが6例が不幸な転帰をたどった。

44. 当院における基質拡張型βラクタマーゼ（ESBLs）産生菌検出例の検討

臨床検査医学，臨床検査部
吉田　敦，山本芳尚，大内友二，家入蒼生夫

目的：多くのセフェム薬に耐性を示す基質拡張型βラクタマーゼ（ESBLs）産生菌の分離状況と病態への関与について明らかにした．

対象・方法：2003年6月から当院におけるESBLs産生菌検出例を対象とし，細菌学的情報と臨床情報を解析した．

結果：12例から18株が分離された（*E. coli* が最も多く9株，次いで *E. cloacae* 5株）．尿路奇形に基づいた長期抗菌薬投与例や，白血病例，細菌性腹膜炎例において，尿や血液から多く分離されていた．約70%で感染症の起炎菌である可能性があり，敗血症による死亡例もあった．散発的に分離された例があった一方，短期間に同じ病棟から分離された例もあった．ESBLs産生菌に対する抗菌薬の選択は限られており，作らない・広げないために抗菌薬の適正使用と感染対策が重要であろう．